

理工学部創立 75 年記念事業における 理工学メディアセンターの役割と今後の課題

いしはら ともこ
石原 智子

(理工学メディアセンター主任)

1 はじめに

慶應義塾大学理工学部は、卒業生の藤原銀次郎氏が私財を投じて1939（昭和14）年に現在の日吉キャンパス内に設立した藤原工業大学（以下、藤原工大）を前身とし、2014年に創立75年を迎えた。「基礎に重点を置いた工学教育、人間性の確立を目指す教養教育、国際交流に役立つ語学教育」という三つの柱を教育方針とし、機械・電気・応用化学の3学科で始まった藤原工大は、1944年に慶應義塾に寄附され慶應義塾大学工学部となった。藤原工大は、創設後まもなく空襲により校舎の8割を失ったため、数か所の仮校舎を経て、1949年に小金井キャンパスへ、1972年に現在の矢上キャンパスへ移転した。その後1981年に理工学部へ改組され、現在では11学科3専攻の組織に発展し、5万人の卒業生、2万人の修士修了生を世に送り出している。2014年6月に創立75年を迎えるにあたり様々な記念事業が行われたが、理工学メディアセンター（以下、メディアセンター）でも、数年間を費やして年史の編纂に携わり、記念式典当日にも、行事の一端を担うなどの役割を果たした。本稿では、メディアセンターが協力するに至った経緯、携わった記念事業の記録を残すとともに、その体験から今後のメディアセンターの役割や課題についても考えてみたい。

2 慶應義塾創立150年と理工学部創立75年

メディアセンターでは図書館職員として研究・教育・医療を支える役割を担う一方で、慶應義塾の職員として本務以外の役割に就くことがある。身近なものでは入試や入学式・卒業式、オープンキャンパスなどがあげられるが、周年事業もその一つである。2008年に慶應義塾は創立150年を迎え、これを記念して『写真集 慶應義塾150年』が同年に刊行された。この写真集の編纂委員会の委員や事務局には主に三田キャンパスの図書館職員が加わったが、当時の理

工学部でも歴史的な写真の中から出版のために265枚を選んで電子化した。その後、理工学部創立75年記念事業を行うにあたり、メディアセンターが写真整理とデジタル化を引き続き行うこととなり、また同記念事業の一つである年史刊行のための事務局を担当することが決まった。

3 年史の編纂

理工学部は節目ごとに年史を編纂してきた歴史をもつが、筆者は『慶應義塾大学理工学部75年史』（以下、75年史）編纂事業に携わった。これについて概要を紹介する。本事業は、2010年12月の教授会で理工学部創立75年記念事業委員会の下に「記念史編纂委員会」（委員長 相吉英太郎教授、幹事 村上俊之教授）が置かれたことに始まる。教員12名から成る編纂委員のほか、50年史編纂経験のある名誉教授2名を顧問とし、事務局をメディアセンターが担当した。また、編集補助・印刷・発送委託の業者として、数社の中から大日本印刷株式会社を選んだ。委員会発足当初は、東日本大震災の直後でその対応にも追われる中、2011年5月に第1回目の編纂委員会を開催した。そこでは、文字中心で枕になるような重い本ではなく、気軽にページをめくって読んでもらえるもの、軽量でも内容のしっかりした年史を作ってもらいたいという記念事業委員会の要望を受けて基本方針が立てられた。その結果、A4判カラー印刷、約200ページとし、本文と資料編から成る以下の内容の年史が編纂された。(1)35年史・50年との継続性を意識し、50年史までの部分は要約しつつ大学を取り巻く歴史的・社会的背景の描写に重きを置いた。(2)50年史以降の25年間、特に組織改革の部分を正史として記録し、次の百年につなげる内容とした。(3)写真や資料を多くし、理工学部の存在に欠かせない人物を「ひと」という記事で紹介し、またコラムを設けて各時代を象徴する話題を掲載した。

なお、近年ではウェブやDVDで刊行する年史も多いが、75年史は記念式典にお招きしたご来賓へ贈る予定があり、紙媒体で4,000部発行とした。

編纂作業は、委員長と幹事、理工学部総務課、事務局から成る編集幹事会を作り、そこで記載事項、形式、内容などの素案を作成し、その案を編纂委員会で承認するという流れで進められた。事務局では、編纂に伴う作業、資料の整理と電子化も同時に行った。従来からの保存資料に加え、卒業生を中心に多くの貴重な一次資料が理工学部に寄贈されたため、それらの整理と保存にも携わるようになった。寄贈資料は公式文書からパンフレット、手書きの原稿などさまざまである。文書類の資料的な価値を見極め、編纂に活かすことを心掛けるとともに、長期保存用の箱などに収めた。また、紙・オープンリール・ソノシート・カセットテープなどを電子化し、編纂業務のために扱いやすくし、一部の資料を機関リポジトリStarにて矢上キャンパス内で公開した。さらに、矢上キャンパスおよび大学当局で保管していた藤原工大時代からの膨大な数の写真の整理も行った。写真収集・選定・電子化の作業に人員を充て1年以上を費やし整理を行った。過去のネガフィルム・ポジフィルムの中から厳選し電子化した写真のアーカイブは、慶應義塾創立150年の際に電子化した写真を含めて7,600枚を超えた。原稿確定後、写真掲載案を作り、キャプションを確認し、原稿に変更があれば写真も選定し直した。さらに、掲載が決まった写真の中で、劣化したものや汚れた写真は補正・修正作業を行った。これにより、色校正の作業を比較的スムーズに進めることができた。これらの写真は、記念式典で放映したDVDや各種の原稿、講演会のスライド、記念展示の写真パネルなど様々な場面でも活用された。

執筆では、まず年表の作成にとりかかった。原稿作成作業は、史実の調査・確認・資料の再収集・校正作業がほぼ中心を占めた。社史専門のライターにも一部の原稿執筆を委託したが、内部資料の調査が相当必要であったため大学史の執筆にはなじまなかったように思う。結果的には委員長が執筆の中心となり、編纂幹事会で大部分の原稿を完成させ、特に史実を正確に記すという点に注力した。これは言葉で言うことは簡単だが、実際にやってみるとかなり時間と労力と根気を要する作業であり、既刊の年史の編集人の苦労が偲ばれた。また、年史は学術書ではないが、理工系の論文に倣い、図のタイトルを

下に配置するなど、理工系の関係者が馴染めるよう工夫した。編纂は、レイアウト作成と修正確認、表記の統一、色校正、製本と装丁案の作成、謹呈の作成、台割の確認など様々な工程を経て完了した。本文中のデザインには製紙王とよばれた藤原銀次郎氏にちなみ藤色を多用し、また氏と関係が深い王子製紙株式会社の紙を銘柄指定して印刷した。

事務局は編纂に伴う周辺業務にも携わった。予算管理、データの整理、座談会のセッティング、業者や関係者との協議・折衝、社中の方々への対応・接客などである。今振り返れば納期と予算を厳守して刊行することへの重みを感じる日々であったが、筆者にとっては学び得ることの多い経験をさせていただいた。年史の編纂は、過去の記録の集成であると同時に未来への配慮であることを痛感した3年間であった。特に、近代大学制度の発達の歴史や戦後から近年の大学改革などの学制史や歴史全般についての知識も必要であったため、これらを学び、大学をとりまく様々な環境変化と今後の在り方について考える機会となったほか、大学そのものや慶應義塾大学理工学部の社会的意義などを自らに問いかけるきっかけにもなった。本書は理工学部教職員及び塾内関係者に配布され、夏以降には関係者や企業、図書館および高等学校、記念事業募金への高額寄附者などへ謹呈させていただいた。

75年史は、塾内の現役の教職員をはじめ、退職教員・卒業生など非常に多くの方々の協力はなしには完成することはできなかった。しかし、皆様多忙中、情報提供、掲載内容の検討、相談、原稿確認などに快く、また迅速に応じてくださった。紙上で失礼ながら、編纂作業にご協力とご支援をいただいたすべての方々に、この場を借りてお礼を申し上げたい。

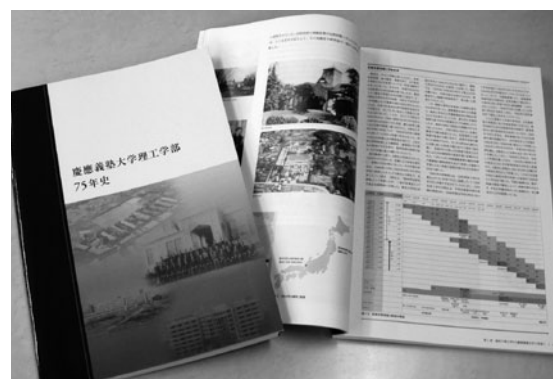


写真1 『慶應義塾大学理工学部75年史』

4 記念式典と記念講演会

2014年6月14日（土）、理工学部創立75年記念式典が日吉キャンパスで挙行政され、隣接する矢上キャンパスでもホームカミングデーとして卒業生をお招きし、記念式典の同時中継・34棟（教育研究棟）を中心とした見学会・同窓会パーティーなどが行われた。メディアセンターでは理工学部同窓会との共催による記念講演会を企画・開催した。講演会は「理工学部75年を振り返る ― 記念史の編纂から ―」と題して、75年史編纂委員長の相吉英太郎教授を講師にお迎えした。筆者は講演会の資料作成や講師との調整を行い、当日は講演会の運営なども担当した。当日は天候にも恵まれ、講演会は矢上キャンパスを訪れた卒業生など150名を超える方々に来場していただいた。

歴史はその組織にとっては財産である。過去の歴史を振り返り、発展過程を確認することは組織の構成員の共通意識を高める経営的な取り組みという側面もあると言えよう。記念式典やイベントはその日限りのことではなく、創立者福澤諭吉の精神と、藤原銀次郎氏、小泉信三氏の思いを我々が継承し、また時代に即して実現できているかどうかを、社中一同が確認し、自省し、今後の発展につなげるための節目の機会となった。



写真2 記念講演会の様子（2014年6月14日）

5 記念展示の開催

学生にも記念事業への関心を高めてもらうため、メディアセンターでは館内で2期に分けて展示を開催し、筆者は両展示に対して内容などのアドバイスを行った。第1期として、2014年3月1日～4月30日の間「福澤諭吉とサイエンス」と題して、『訓蒙窮理図解』、福澤や門下生の著した物理学の教科書

などを展示した。福澤諭吉が「実学」という言葉に「サイエンス (Science)」とルビをふり、自然科学を重視していたことを学生に知ってもらうことができた。第2期として、5月27日～6月30日の間「写真で辿る理工学部の歴史」と題する展示を開催した（写真3）。展示では藤原工大から理工学部の現在までを、寄贈資料や各時代を象徴する写真とともに紹介した。写真パネルは同年の慶應連合三田会と理工学部の学園祭（矢上祭）でも展示され、多くの方にご覧いただいた。さらに、式典当日には卒業生の藤江邦男氏から寄贈された福澤・藤原関連資料と展示ケースのお披露目を兼ねた特別展示も開催した。



写真3 第2期展示「写真で辿る理工学部の歴史」

6 教員著作コーナーの新設

記念事業そのものではないが、メディアセンターではこれを機に、本館1階にある慶應義塾関連図書コーナーに「教員著作コレクション」を新設した。これは、理工学部で教鞭をとっていた教員の著作を集約・整理し、理工学部の知的財産として後世に残すことを目的とするもので、研究室から寄贈された歴代の著名な教員の著書を整理し、利用に供した。

7 図書館職員の大学への貢献と副次的効果

(1) 教職員の協働

以上のような様々な役割をメディアセンターが担ってきたが、75年史や講演会は、教員との協働であったことが特徴である。多忙な理工学部の教員に負荷がかからないよう、編纂は各教員の空き時間に個別に事務局が対応するなどの措置もとりながら進められた。また、他部署の業務に触れる機会を持ち、各部署の特徴や考え方を知ることにより、いろいろな仕事が慶應義塾を支えていることを改めて深く理

解する効果もあった。編纂のための調査は、大学キャンパスを超えて一貫教育校まで、あらゆる部門の協力を得る必要があった。現在の慶應義塾では、教職員が協働するための体制は十分ではないと思われるが、教育研究を進める本来の大学の価値を考え、教員との協働や連携が行いやすいしくみや環境を今後整えていくことが大切であると考えられる。

(2) 活かされた図書館職員の力

75年史編纂では、事項調査や内容確認などのレファレンス調査を中心に、教員からの諸々の問い合わせに迅速に対応しなければならなかった。文献にあたることはもちろん、その分野が得意な人を頼りに調査することも多くあった。また、情報を収集し集められた資料の価値を判断する力も必要であった。資料を整理し・古い資料を長期保存する技術、電子化とインデックス作成・写真の長期保存や整理のためにアナログとデジタルの両方の知識や経験も必要であった。今回は学内で執筆した原稿がほとんどを占めたため、文章を推敲して内容を確認し修正するために、論理的に文章を表現できる力に加えて全体を見通しながら原稿細部を見ることも編纂には大切なことであった。さらに、学内の各部局をはじめ、学外の関係者や卒業生とコミュニケーションをはかり支援を得やすくすることや、取引先と戦略的に交渉する能力、時には予想外の困難なできごとに対応できる問題解決能力、数年間の長期にわたって責任を持って遂行できる精神力と体力なども必要であった。これらのスキルがあれば編纂作業に有意であると考えられるが、年史の編纂はプロジェクトでもあり、図書館職員なら誰でも適性があるということでもないように思う。一方、展示の開催については、既にノウハウを持っており、メディアセンターが自主的に企画して開催したという点で図書館職員の力が存分に活かされたと言える。

8 課題：記念事業での経験を踏まえて

(1) 図書館として

理工学部へ提供している資料の約9割は現在電子資源であり、多くは電子ジャーナルである。図書館は今後、単に在学中の教育や研究を支援するだけでなく、留学生を含めて生涯にわたって主体的に学ぶ力を支援する役割が一層重要になるのではないかと筆者は想像している。適切な情報源を探し出し、そ

の情報が信頼に値するか自ら考え判断する力、また、それらを社会や仕事に役立てていく力が大切だと思われるからである。慶應義塾大学卒業後も図書館を生涯、自分の「知の拠点」として利用してもらえよう、デジタルとアナログのバランスをとりながら今後の図書館サービスを考える必要がある。

藤原工大初代学長であった小泉信三氏は、自著『読書論』の中で「すぐ役立つ本はすぐに役に立たなくなる本である」と述べ、長年の風雪に耐えてきた古典や名作などの書物を読み、人間性の確立に努めることを説いていた。藤原工大では、理数系授業に加えて人文系の教科もかなり取り入れられていた。戦争色が深まるにつれて人文系の学問はカリキュラムから削除されたが、慶應義塾大学ならではの文理融合型の教養教育が創設時から行われていたことを示す一例である。図書館の役割として、研究に必要な情報を提供して専門教育を支援する一方、学生の視野を広げ、専門のみに偏らない、精神の涵養と人格の陶冶をはかることをサポートすることも大切である。現在でも、館内でサイエンスカフェなどの催事・教養図書の充実・企画展示などを行っているが、「人間性を確立するための教養教育」という理念の一端を担っていると考えられる。

また、理工学部1、2年生が学ぶ日吉キャンパスでの教育支援を充実させることも大切である。工学部が小金井から矢上キャンパスに移転する際の計画案の中に、「日吉図書館との連携を密にする」とあり、学年やキャンパスで分断されないよう日吉キャンパスを視野に入れた教育と図書館サービスが考えられていた。矢上キャンパスでの専門性の高い研究支援に加えて、今後、意識的にサービスを展開していくべき課題と思っている。

(2) 継承するということ

記録は意識的に残さない限り、雲散霧消となってしまうことが多い。記録を残す習慣がない、情報が引き継がれていないなどの理由から今回の75年史の編纂で執筆が難航した場面もあった。記録を残すことは面倒な作業であるが、日々発生する情報を記録するしくみを作り、継承することは大切である。また、人の記憶も重要な情報である。話を聞き書き残すこと、座談会などの音声を残すことも大切だ。これらの記録物を電子化し、現物もアーカイビングしていくことは大学の重要な役割の一つかと思う。今

回は慶應義塾の主要な年報や広報誌を調べることも多かったが、電子化されていれば、編纂作業もかなり省力化できたと思う。

大学の理念を継承しつつ発展させる手段として、周年事業で新しい建物を作り、外側から変革を起こす時であれば、カリキュラムの変更や学部・大学院を改組するなど内側から変革を起こす時もある。大学をとりまく環境は50年史の頃と比べて大きく変わったが、今後はより一層厳しい競争のもとに社会に貢献できる大学だけが研究大学として生き残るであろう。慶應義塾でも、その歴史を振り返れば、財政的な危機や経営困難のため、大学部は一時期その存続が危ぶまれ廃止の説さえ出たことが『慶應義塾百年史』にも記されている。75年史は一学部の年史であるが、社会的な背景をも描写しており、日本の理工系の教育の歴史として読むこともできる。国や社会から求められる人材を輩出するため、大学は大変な努力を続け、現在につながっていることが理解できよう。私立大学が存続するためには「人」は大切な資産である。今後、複雑化し、地球規模で社会が変わり、狭い常識が通用しなくなるような時に、慶應義塾で働く人たちの考え方や判断軸をどう揃えていくかということは、人材育成の面でも重要ではないだろうか。時代に即した戦略や経営を組み立てるための土台づくりには、同質性に甘んじず多様性を受け入れることのほかに、年史などを研修教材に活用することも検討されて良いだろう。

メディアセンターのサービスは、数値で表しにくい上に、資料自体の電子化が進んだこともあり、大学に貢献しているにもかかわらず、それがとても見えにくい状況にある。従って、周年事業などを契機とし理念に立ち返り、危機感を持ち、メディアセンターが大学内でより積極的に貢献できるよう内側から変わって「見える化」していくことが必要である。今回は、学部の記念事業の一端をメディアセンターが担ったが、今後、図書館職員が担当する業務やサービスは、教員が教育・研究に専念することができるよう、学内の知的な基盤整備へと移行していくであろう。電子資源の契約は勿論、研究資金の調達・管理を促進するためのサポート、研究データ共有・保存のための環境整備、デジタルアーカイブの整備、学位論文など研究成果の収集と発信などに従事する比重がより高まるのではないだろうか。

9 おわりに

理工学部創立75年記念事業を皮切りに、慶應義塾ではいくつかの周年事業が進められている。2017年には医学部が創立百年を迎え、新病院棟（1号館）の竣工がその年度に計画されている。また、創設時に理工学部と関係の深かった湘南藤沢キャンパスは2015年に創立25年を迎えるが、「未来創造塾」として世界中の志ある若者が集まって教育・研究を行うことができる環境が整う予定である。

藤原工大創立者である藤原銀次郎氏の理想は、「広い視野を持ち、経営感覚を持った技術者を世に送り出す」ことであり、これは現在の理工学部にも通じる使命であると思う。建学の精神を継承することは、私学にとって最も大切な命綱であり、困難に直面した時に解決するプロセスを作る礎となる。理工学部が一丸となってこれから進むべき道を切り開くために、世界トップレベルの教育研究拠点の形成を目指した今回の記念事業が“springboard”となってほしい。そして、次の時代の最先端を切り開く国際人を育成し、「広い視野」すなわち地球規模の視点でさらに発展していくことを願いたい。また、このために一層、奮励努力することを自分に課して擱筆させていただくこととする。

参考文献など

- ・第一期生同期会編集委員会編、『藤原工業大学：教育の軌跡：第一期生の記録』。[出版地不明]：藤原工業大学第一期生同期会，1999.6，p. 146.
- ・水谷啓二、『藤原銀次郎伝』東京：東洋書館，1954. p. 251. (日本財界人物伝全集；第4巻)
- ・慶應義塾編、『慶應義塾百年史』中巻(前) 東京：慶應義塾，1960.12，p. 189-199.
- ・『慶應義塾紀事』[東京：慶應義塾]，1883.4，24 p.
- ・文部省 [編]、『学制百年史』東京：帝国地方行政学会，1972，2冊；22 cm.
- ・小泉信三、『読書論』東京：岩波書店，1950.10，(岩波新書；47) p. 12.
- ・理工学部創立75年記念式典（映像）
http://www.st.keio.ac.jp/news/20140729_001.html